

東北学院大学 学部2年生の授業外学習に関する調査 ーラーニング・コモンズでの学習支援の検討に向けてー

A Survey on Out-of-Class Learning of Senior Students in Tohoku Gakuin University

東北学院大学 ラーニング・コモンズ 遠海友紀

1. はじめに

中央教育審議会(2012)による、「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて(答申)」などによって、大学生の主体的な学習の必要性が明示されるようになった。これを受けて各大学では、授業におけるアクティブラーニングの実施や、それに伴う学習活動を支える環境の整備を行っており、その一環としてラーニング・コモンズを設置する大学が増えている。

ラーニング・コモンズとは、「主として学生を対象とし、学習支援のための設備・施設、人的サービス、資料を総合的にワンストップで提供する学習空間(呑海・溝上 2012)」と定義されており、学生の学習を支援するための様々な設備やサービスが用意されている。文部科学省の調査によると、ラーニング・コモンズを整備・活用している大学は2011年では33.9%(文部科学省 2014)であったが、2014年には55.6%(文部科学省 2016)となっており、今後もラーニング・コモンズを設置する大学は増加することが見込まれる。

東北学院大学では、2016年9月にラーニング・コモンズ「コラトリエ」(以下、コラトリエ)が土樋キャンパスに開設された。コラトリエでは、電子黒板や貸出ノートパソコン、プロジェクタなどのICT機器や可動式ホワイトボードなどの道具を用いてグループで作業できる学習環境を提供することに加え、アカデミックスキルを中心とした学習支援を行っている。設置されたキャンパスの立地の関係で、主な利用者は、文学部、経済学部、経営学部、法学部の3・4年生となっている。

ラーニング・コモンズでの学習支援は、正課の学習に対するものと正課外の学習に対するもの、個別対応やセミナー形式での対応など、その内容や方法は個々の大学の状況に合わせて検討・実施されている。そのため、設置主体である大学の学習支援に関する考えに加え、利用者の学習傾向を把握することが重要となる。しかしながら、学部2年生終了時の段階で、学生が授業外学習にどのように取り組んでいるのか、学習に取り組む際にどのようなことに困っているのかなど、学生の学習傾向を十分に把握できていない。つまり、コラトリエでの学習支援を検討するにあたり、学生の状況に関する情報が不十分である。

そこで、本稿ではコラトリエでの学習支援の検討にむけ、学部2年生に対して質問調査を実施し、授業外学習の状況や学習環境の好み、学習に取り組む中で遭遇する問題とその解決方法、学習支援に対するニーズを把握することを目指す。

2. 調査の対象と方法

2017年1月に東北学院大学において、アカデミックスキルの習得を目的として主に学部2年生向けに開講されている「研究・発表の技法」または「メディアリテラシー」を受講していた学生に対して、質問調査を行った。調査の実施に際しては、授業中に口頭で、または授業時間外にLMSのお知らせ機能を用いて担当教員、または筆者から調査の趣旨説明をおこなった。調査は、リアルタイム評価システム「REAS」を用いて、オンライン上で回答してもらった。

質問項目は、学生の属性に関する2問、授業外学習に関する8問、学習における問題解決に関する3問、主体的な学習態度に関する12問、学習支援のニーズに関する1問の計26問で構成した。回答の形式は、選択式が24問、記述式は2問であった。このうち、本稿では学生の属性に関する質問、授業外学習に関する質問、学習における問題解決に関する質問、学習支援のニーズに関する質問の計14問を分析の対象とした。

今回の調査では、授業を受講していた1,241人のうち282人(22.72%)から回答を得た。本調査では、学部2年生の授業外学習について明らかにすることを目的としていたため、1年生、3年生、4年生を分析対象から外した。その結果、学部2年生の有効回答者数は、文学部英文学科3人、文学部総合人文学科3人、文学部歴史学科73人、経済学部経済学科18人、経済学部共生社会経済学科6人、経営学部経営学科20人、法学部法律学科21人、工学部電子工学科23人、教養学部人間科学科12人、教養学部言語文化学科16人、教養学部情報科学科8人、教養学部地域構想学科7人の計210人であった。

3. 結果

3.1. 学生が授業外学習に取り組む時間

表1は、学生が1日あたりどの程度、授業外学習に取り組んでいるのかについての結果である。この質問では、授業の予習・復習、学習課題については「授業に関すること」、資格試験や自分が興味のあることについてなどの授業とは関係しない学習については「授業に関しないこと」とし、それぞれについて選択式で尋ねた。

表1 一日の授業外学習時間

時間	授業に関すること (%)	授業に関しないこと (%)
ほぼしない	55 (26.2)	94 (44.8)
30分未満	44 (21.0)	42 (20.0)
30-60分	57 (27.1)	39 (18.6)
60-90分	32 (15.2)	21 (10.0)
90分以上	22 (10.5)	14 (6.7)

「授業に関すること」では、30分から60分（57人、27.1%）が最も多く、次いでほほしない（55人、26.2%）となっていた。「授業に関しないこと」については、ほほしない（94人、44.8%）が最も多く、次いで、30分未満（42人、20.0%）という結果であった。授業に関しない学習として、何をしているのか尋ねた結果、教員採用試験や公務員試験などの試験勉強、英検や簿記などの検定に向けた勉強、読書などの回答がみられた。

学生の主体的な学習が求められる状況ではあるが、授業に関することについても、授業に関しないことについても、学生の授業外学習の時間は短い。この理由として、これまでの授業においては、授業外学習は明確には求められない、または求められても評価対象ではないなど、学生がその必要性を感じにくかったことが考えられる。これに対し、東北学院大学では2017年度のシラバスから、授業前後それぞれにおいてどのような学習が求められるのか授業ごとに明記するようになった。今後、シラバス改訂による授業外学習時間への影響を継続的にみていく必要がある。

3.2. これまで授業で取り組んだ学習課題

表2は、学部2年生の終了時点までに、授業で取り組んだことのある学習課題について尋ねた結果である。この質問は選択式、複数選択可で回答を求めた。表の人数の欄に示したパーセンテージは、各項目を選択した人数をそれぞれ、本調査の有効回答者数（210人）で計算したものである。

表2 これまで授業で取り組んだ学習課題

授業で取り組んだ学習課題	人数	(%)
レポートを作成する	207	(98.6)
授業内容に関する知識をおぼえる（小テスト/テスト）	161	(76.7)
レジュメを作成する	143	(68.1)
プリントや問題集の課題に取り組む	143	(68.1)
教科書や資料を読む	142	(67.6)
発表用スライドを作成する	85	(40.5)
フィールドワーク	40	(19.0)

ほとんどの学生が、レポート作成に取り組んだ経験があると回答した。それ以外の学習課題についてみると、7割近くの学生がテストやレジュメの作成、問題集に取り組んだり、資料を読んだりした経験があることがわかる。対して、発表用スライドの作成やフィールドワークなど、グループで課題に取り組む機会も多く想定される活動に取り組んだ経験のある学生は半数に満たなかった。

3.3. 学生が授業外学習に取り組んでいる場所

表3は、学生が授業外学習に取り組んでいる場所について尋ねた結果である。この質問は選択式、複数選択可で回答を求めた。表の人数の欄に示したパーセンテージは、各項目を選択した人数をそれぞれ、本調査の有効回答者数（210人）で計算したものである。

表3 授業外学習に取り組む場所

場 所		人数	(%)
学 内	大学図書館	126	(60.0)
	学食	38	(18.1)
	教室・研究室	20	(9.5)
	その他学内施設	24	(11.4)
学 外	自宅	169	(80.5)
	カフェ/ファミレスなど	43	(20.5)
	公共図書館	20	(9.5)
	友人宅	17	(8.1)

学内での学習場所では、大学図書館（126人、60.0%）が最も多く、次いで学食（38人、18.1%）、教室・研究室（20人、9.5%）という順であった。その他学内施設とは、生協横や泉キャンパス2号館エレベーター前のラウンジ、部室、工学基礎教育センター、コラトリエを選択した回答結果を合計したものである。学外での学習場所では、自宅（169人、80.5%）が最も多く、次いでカフェやファミリーレストラン（43人、20.5%）、公共図書館（20人、9.5%）という順であった。

学内、学外を合わせてみると、自宅での取り組みが最も多く、次いで、大学図書館という順になっており、多くの学生がこの2箇所で授業外学習に取り組んでいることが推察される。これらの場所は個人での学習活動に取り組みやすい場所であると考えられる。

3.4. 授業外で学習する際に勉強しやすいと思う場所の特徴

表4は、授業外で学習する際、どのような環境が勉強しやすいと思うかについて尋ねた結果である。この質問は選択式、複数選択可で回答を求めた。表の人数の欄に示したパーセンテージは、各項目を選択した人数をそれぞれ、本調査の有効回答者数（210人）で計算したものである。

空間の開放性についてみると、周りの様子が見えるオープンな空間（34人、16.2%）より、周りの様子が見えない個別の区切られた空間（109人、51.9%）が好まれている。また、空間の広さの好みにはあまり違いは見られなかった。さらに、空間の静寂性についてみると、会話や音楽が聞こえる空間（27人、12.9%）より、静かな空間（119人、56.7%）が好まれる傾向に

ある。加えて、飲食ができる空間（72人、34.3%）も勉強に取り組みやすい環境として比較的高い選択率になっている。その他（4人、1.9%）を選択した学生に、具体的な特徴について自由記述でたずねたところ、「長くいても疲れない空間」、「スペースさえあれば場所は問わない」、「どこでもいい」、「家族のいるリビング」という記述がみられた。

表4 授業外学習に取り組みやすいと思う場所の特徴

空間の特徴	人数	(%)
個別の区切られた空間	109	(51.9)
オープンな空間	34	(16.2)
広々とした空間	26	(12.4)
狭い空間	37	(17.6)
静かな空間	119	(56.7)
会話や音楽の聞こえる空間	27	(12.9)
飲食ができる空間	72	(34.3)
相談に対応する人がいる空間	14	(6.7)
その他	4	(1.9)

ここから、今回の調査に回答した学生の多くは、広さにはこだわらないが、周りの様子が見えない個別の区切られた静かな空間での学習を好むことが推察される。これはグループで学習するより、ひとりで学習することに適した環境であると考えられる。

3.5. 授業外で学習する際に必要な設備・機器

表5は、授業外で学習する際に必要だと思う設備や機器について尋ねた結果である。この質問は選択式、複数選択可で回答を求めた。表の人数の欄に示したパーセンテージは、各項目を選択した人数をそれぞれ、本調査の有効回答者数（210人）で計算したものである。

表5 授業外で学習する際に必要だと思う設備・機器

授業外学習に必要な設備・機器	人数	(%)
私物のノートパソコンが使える	160	(76.2)
貸出ノートパソコンやデスクトップパソコンが使える	49	(23.3)
電子黒板が使える	6	(2.9)
プロジェクタが使える	4	(1.9)
図書/雑誌などの資料が閲覧できる	102	(48.6)
ホワイトボードが使える	10	(4.8)
その他	7	(3.3)

私物のノートパソコンが使える（160人、76.2%）ことを選択した人が最も多く、次いで図書/雑誌などの資料が閲覧できる（102人、48.6%）の順になっていた。授業外学習に必要なと思

う設備・機器として、グループで学習課題に取り組む際に利用が想定される機器や道具（電子黒板、ホワイトボード、プロジェクタ）を利用できることを選択した学生は少ない。また、「その他」を選んだ学生に具体的に必要だと思うものを自由記述で尋ねたところ、ゴミ箱や自動販売機、コンセントがある空間、ケータイ電話が利用できたり飲食ができたりすること、という記述がみられた。

3.6. 学習課題に取り組む際の好み

個人で取り組む学習課題を進める際、「ひとりで取り組む」ことを好むか「友達と一緒に取り組む」かについて選択式で質問した結果、162人（77.1%）がひとりで取り組むことを選び、48人（22.9%）が個人で取り組む学習課題であっても、友達と一緒に取り組むことを選択した。

3.7. 大学の学習で困った経験のあることとその解決方法

表6は、学部2年生の終了時点までに取り組んだ大学での学習において、困った経験のあることについて尋ねた結果である。この質問は選択式、複数選択可で回答を求めた。表の人数の欄に示したパーセンテージは、各項目を選択した人数をそれぞれ、本調査の有効回答者数（210人）で計算したものである。

表6 大学での学習で困った経験のあること

困ったこと	人数	(%)
履修（登録方法も含む）	100	(47.6)
レポートの書き方	90	(42.9)
授業内容の理解	90	(42.9)
勉強に対するモチベーション	87	(41.4)
定期試験勉強の仕方	71	(33.8)
予習/復習など勉強の進め方	66	(31.4)
課題提出に向けたスケジュール管理	59	(28.1)
他者とのコミュニケーションの仕方/関わり方	56	(26.7)
発表の方法	53	(25.2)
授業ノート/記録の取り方	52	(24.8)
ディスカッションの仕方	47	(22.4)
資格試験の勉強の仕方	47	(22.4)
語学の学習方法	31	(14.8)
パソコンソフトの使い方	28	(13.3)
図書館の利用方法	15	(7.1)
情報検索の方法	15	(7.1)
特にない	16	(7.6)
その他	1	(0.5)

その結果、これまで大学での学習に取り組む中で困ったこととして、「履修（登録も含む）（100人、47.6%）」が最も多い結果となった。次いで「レポートの書き方（90人、42.9%）」と「授業内容の理解（90人、42.9%）」となっていた。「3.2. これまで授業で取り組んだ学習課題」での結果との関連を見ると、大学での学習課題として取り組んだことあると答えた学生が最も多かった「レポートの作成」について、困った経験があると答えた人が多くみられる。また、これらに加えて、活動の結果を実感しやすい「授業内容の理解」や「勉強に対するモチベーション」、「定期試験勉強の仕方」や「予習・復習の進め方」も多くの学生が困った経験があると選択している。対して、「ディスカッションの仕方」や「資格試験の勉強の仕方」、「語学の学習方法」、「パソコンソフトの使い方」、「図書館の利用方法」、「情報検索の方法」などに困った経験があると選択した学生は比較的少なかった。

これらは、取り組んだ経験の程度が個々人によって異なることも想定され、選択した学生が少なかったからといって、学生が問題なく取り組んでいる活動であるとは言い切れない。また、大人数の授業が中心の学部2年生においては、繰り返し学習課題に取り組む経験や、フィードバックを得る機会が多くないことなどから、学生が自分自身の問題を認識しにくいことも想定される。今後、それぞれの項目において、例えば学生の自己評価と教員の評価との関連などをみていく必要がある。

表7は、大学での学習に取り組む中で困った経験のあることに対して、どのように対応したかを尋ねた結果である。この質問は選択式、複数選択可で回答を求めた。表の人数の欄に示したパーセンテージは、各項目を選択した人数をそれぞれ、本調査の有効回答者数（210人）で計算したものである。

表7 学習に取り組む際に困ったことの解決方法

解決方法	人数	(%)
自分で考える	117	(55.7)
誰かに相談する	113	(53.8)
インターネットや本で調べる	103	(49.0)
何もしない	9	(4.3)
その他	0	(0.0)

問題解決の方法として最も多かったのは、「自分で考える（117人、55.7%）」であった。次いで、「誰かに相談する（113人、53.8%）」が多く、そのあと「インターネットや本で調べる（103人、49.0%）」となっていた。学習に取り組む際、困ったことがあっても「なにもしない」と回答した学生も9人（4.3%）いた。

表8は問題解決の方法として「誰かに相談する」と回答した学生に対して、誰に相談するの

か尋ねた結果である。この質問は選択式、複数選択可で回答を求めた。表の人数の欄に示したパーセンテージは、各項目を選択した人数をそれぞれ、「誰かに相談する」と回答した113人で計算したものである。

表8 問題を解決するための相談相手

相手	人数	(%)
友達	113	(100.0)
先輩	43	(38.1)
職員	17	(15.0)
その授業を担当する教員	22	(19.5)
その授業の担当とは別の教員	2	(1.8)
その他	2	(1.8)

その結果、誰かに相談すると回答した学生全員が相談相手として「友達」をあげた。教員や職員に相談するという回答は少ない。「その他」と答えた2人は相談相手として、TAやSAといった授業のサポートに入っている学生スタッフをあげた。

相談相手として友達が最も多かった理由として、同じ課題に取り組んでおり状況が共有できているので相談しやすいことなどが想定される。また、教員への相談が多くなかった理由として、授業時間以外に教員に相談する機会を学生自身で作るのが難しいことが考えられる。

3.8. 学習課題に取り組む際の好みと問題解決方法の関係

表9は「3.6. 学習課題に取り組む際の好み」の結果と、「3.7. 大学の学習で困った経験のあることとその解決方法」で扱った「学習に取り組む際に困ったことの解決方法（表7）」の関連を整理したものである。この質問も選択式、複数選択可で回答を求めた。表の人数の欄に示したパーセンテージは、各項目を選択した人数を「3.6. 学習課題に取り組む際の好み」に関する質問において、「学習課題にひとりで取り組む」と回答した162人、「友達と取り組む」と回答した48人を母数としてそれぞれ計算したものである。

表9 学習課題に取り組む際の好みと問題解決方法の関係

相手	自分で考える (人)	誰かに相談する (人)	ネットや本で調べる (人)	何もしない (人)
ひとりで (162人)	60.5% (98)	48.8% (79)	51.2% (83)	4.9% (8)
友達と (48人)	39.6% (19)	70.8% (34)	41.7% (20)	2.1% (1)

「学習課題にひとりで取り組む」を選択した学生が、問題解決の方法として最も多く選択したのは、「自分で考える (98人、60.5%)」であった。対して、「友達と取り組む」を選択した学生が問題解決の方法として最も多く選択したのは、「誰かに相談する (34人、70.8%)」であった。

「学習課題にひとりで取り組む」を選択した学生は、まず自分で考え、次いで調べてみて、そのあと人に相談することで学習に取り組む際の問題を解決する流れが想定される。一方、「友達と取り組む」を選択した学生は、まず誰かに相談することで問題を解決しようとする傾向が伺える。

表10は、「3.6. 学習課題に取り組む際の好み」の結果と「3.7. 大学の学習で困った経験のあることとその解決方法」で扱った「問題を解決するための相談相手（表8）」との関連を整理したものである。表中のパーセンテージは、学習に取り組む際に困ったことの解決方法として「誰かに相談する」を選択した学生113人のうち、「ひとりで取り組む」を選択した79人、「友達と一緒に取り組む」と回答した34人を母数としてそれぞれ計算したものである。

表10 学習課題に取り組む際の好みと問題を解決するための相談相手

	友達	先輩	職員	その授業を担当する教員	その授業の担当とは別の教員	その他
ひとりで (79人)	75 (94.9%)	34 (43.0%)	15 (19.0%)	15 (19.0%)	2 (2.5%)	2 (2.5%)
友達と (34人)	34 (100.0%)	7 (20.6%)	2 (5.9%)	7 (20.6%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)

「学習課題にひとりで取り組む」を選択した学生にも、「友達と取り組む」を選択した学生にも、「友達」が相談相手として最も多く選択された。特に、「友達と取り組む」を選択した学生全員が相談相手として友達を選択している。「学習課題にひとりで取り組む」を選択した学生は、「友達と取り組む」を選択した学生に比べ、「先輩」「職員」を相談相手として比較的多く選択している。ここから、彼らは「友達と取り組む」を選択した学生より相談相手の選択肢を多く持っていることが推察される。

3.9. 必要だと思う学習支援

学習に取り組む際に受けてみたいと思う学習支援について、自由記述でたずねた。この質問に対する回答は任意であり、22名から24件の記述を得た。

この記述を内容ごとに整理すると、プレゼンテーションを準備する際の技術的なアドバイス、必要な資料の探し方、大学生としての学び方など「アカデミックスキルに関する支援（9件）」、わからないことが相談できるスタッフがいることや、授業の教材共有など「学習環境に関する支援（6件）」、外部講師を招いたセミナーや、学問領域を超えた学習機会の提供など「学習機会の提供（7件）」、さらに「その他（2件）」に分類することができた。

今回、この質問に対する回答は多くなかった。この理由として、そもそも個別に相談できる環境が身近でないことや、専門の内容やより発展的な内容に触れる機会がまだ多くないことか

ら、その必要性を感じる機会が多くないことも考えられる。ゼミなどの演習活動などに本格的に取り組むことで、その必要性への認識が変化することも想定されるため、継続的な調査が必要となる。

4. 今回の調査結果を踏まえたコラトリエでの学習支援の検討

本稿では、3・4年生が在籍するキャンパスにあるラーニング・コモンズ「コラトリエ」での学習支援の検討に向け、コラトリエがないキャンパスで学ぶ学部2年生の授業外学習の状況や、学習に取り組む際に遭遇する問題の解決方法、学習支援に対するニーズを質問調査によって明らかにすることを目的とした。

その結果、授業に関することであっても、7割以上の学生の授業外学習時間は1日あたり60分未満となっており、短いことがわかった。また、授業に関しないことについては6割以上が30分未満となっていた。本学では、シラバスに授業前後の学習課題について明記する取り組みが始まっており、学生の授業外学習は今後増加することが想定される。こういった状況の中で、コラトリエは学生の授業外学習の場の1つとしてその役割が期待できる。

今回の調査では、多くの学生が学内では大学図書館、学外では自宅を授業外学習に取り組む場所として選択した。また、授業外学習に取り組むやすいと考える場所として、個別の区切られた静かな空間を選択した学生が多くみられた。その理由として、学部2年生までに学生が取り組む学習課題の多くは、レポート作成や知識をおぼえる試験勉強といった個人学習が多いことが今回の調査結果から推察される。本学では現在、全学的にアクティブラーニングの導入を進めている。これにともない今後、今回の調査結果が変化することが想定され、学部1・2年生にとってもコラトリエで提供している学習環境や支援が有用になると考えられる。

コラトリエはグループでの学習活動を念頭に設計されており、個別の区切られた空間は多くない。また、時間によっては、グループで取り組む学習課題についての議論が活発に行われる非常ににぎやかな空間になり、今回の調査で多くの学生が選択した状況とは異なる学習空間となる。しかし、学部3・4年生になると、演習などのゼミ活動など、グループで議論しながら完成を求められる学習課題に取り組む機会が増加する。取り組む学習課題の内容や条件によって活動しやすい場所や環境は異なることから、学生たちは自分たちが取り組む学習課題に合わせて学習環境を選択することが必要となる。コラトリエは、図書館とは別に設置された施設であるため、個人で取り組む学習課題の学習場所とのすみ分けも含め、今後コラトリエを学生がどのように活用するのかについての調査が必要となる。

大学の学習で困った経験のあることとその解決法について尋ねた結果、半数近くの学生が、履修登録、レポートの書き方、授業内容の理解、勉強に対するモチベーションなどに関して困っ

た経験があると回答した。解決法で最も多かったのは、自分で解決することであったが、誰かに相談することで解決しようとする学生も半数以上いた。相談相手としては、圧倒的に友達が多い。学習形態の好みとの関連を見た結果、ひとりで学習課題に取り組むことを好む学生は、まず自分で考え、次に調べてみて、それでもわからなければ相談するという問題解決の流れが想定される結果であった。対して、友達と学習課題に取り組むことを好む学生は、まず相談することで問題を解決しようとするのが推察される結果となっていた。また、ひとりで学習課題に取り組むことを好む学生は、友達と学習課題に取り組むことを好む学生に比べて、相談相手の選択肢が多いことが推察された。どちらの学習スタイルを好む学生にとってもコラトリエが、学習課題に関して自分では解決できないことを気軽に相談できる選択肢の1つとなるよう、支援の存在の周知だけでなく、相談しやすい体制の検討に取り組むことが求められる。

必要だと思う学習支援について尋ねた結果、今回の有効回答者数に対して具体的な記述をした学生は少なかった。また、ここで得られた回答は、先に示した大学での学習で困った経験のあることとの兼ね合いも強くない。しかし、アカデミックスキルに関する支援といった大学での学習に取り組む際に欠かせないものや、自分の状況に合わせて相談できる体制、個人の専攻内容にとどまらない学習機会の提供などのニーズは、学部学科に属さないコラトリエの特性を活かして対応可能な要望である。現在、コラトリエでは教員による個別学習相談に加え、レポートの書き方や発表の方法などアカデミックスキルに関するセミナーや、読解力の習得を目指したり、大学卒業後の自分について考えるワークショップなどを定期的で開催している。これらの内容は、今回の調査で明らかになった学生が学習活動に取り組む際に困った経験のあることや、学習支援のニーズに対応している。

2017年後期の時点でのコラトリエの学習支援サービスの利用者は、決して多いとはいえない状況ではあるが、少しずつその存在が認識され利用されるようになってきた。しかし、授業外学習時間の比較的少ない学生の学習を授業外でどのように促すことができるのか、また、学習に関して困ったときに教員に相談する習慣のない学生に、学習相談の利用を選択肢としてどのように定着させるのかなど、検討すべき課題は多くある。こういった状況を踏まえ、コラトリエでは2018年度から、授業と連携したセミナーやワークショップの開催や泉キャンパスでの個別学習相談の実施を検討している。授業と連携することで、コラトリエでの学習支援の存在を学生に周知することや、各授業の学習課題にあわせた学習支援の実施が期待できる。また、個別学習相談の機会を広げることで、大学生活の早い段階で学習支援を利用する習慣を身に付けることができ、学習に関して困ったときに相談するという選択肢を学生に提供できると考える。

今回の調査では、コラトリエのないキャンパスで学生生活を送る学部2年生時点での授業外学習について調査を行った。今後、同様の調査の対象を学部3・4年生に広げるとともに、コ

ラトリエでの学生の学習活動の様子を分析することで学習支援の認知やニーズを確認し、今後の学習支援の内容や体制についてさらに検討していく予定である。

参考文献

中央教育審議会（2012）「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm

（参照日2018.01.05）

呑海沙織・溝上智恵子（2012）「日本の大学図書館における学習支援の現状」大学図書館問題研究会誌、第35号：7-18

文部科学省（2014）「大学における教育内容等の改革状況について（平成24年度）」

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/1353488.htm（参照日2018.01.05）

文部科学省（2016）「大学における教育内容等の改革状況について（平成26年度）」

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/1380019.htm（参照日2018.01.05）

付記

- ・本稿は、遠海友紀・嶋田みのり・佐藤恵・村上正行・稲垣忠（2017）大学教育学会第39回大会発表要旨集録，246-247を加筆修正したものである。
- ・本調査は平成28年度・平成29年度東北学院大学学長教育改革研究助成金の助成を受けたものである。
- ・本調査はJSPS科研費17K12949の助成を受けたものである。